
コウツウジコロサレヒト

読書家

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

コウツウジコロサレヒト

【Nコード】

N4717R

【作者名】

読書家

【あらすじ】

突然の事故で死んだ青年が平行世界に行くお話です
設定やあらすじなどが嫌な人はみないでください
あと、この小説は、暇つぶし程度に読んでください

プロローグ

ここはどこだ？

あれ？なんでここにいるんだ

あれ？あれ？

—————回想—————

俺は何時ものように朝起きて

何時ものように学校に行って

何時もように授業を受け

何時ものように下校し

何時ものように家に帰り

何時ものように寝た

そんな、何時もの日常が突然音をたてて崩れた

その日、俺は何時ものように学校に登校している途中だった

俺が赤信号で待っていると突然子供が車道に乗り出した

（危ない！）

そう思った瞬間、俺は地面に倒れていた

（あれ？俺は何やってるんだ？）

訳が分からない。とりあえず体を起こしてみる

（体が動かない）

かろうじて動く自分の手をみてる

(真っ赤だ)

それを見た瞬間、悟った

ああ、俺は死ぬんだ

呆気ない、本当に人間と言うのは脆い

痛い、眠い、苦しい、誰か助けて

助けを呼んでも無駄なのに俺は呼ばずにはいらなかった

「た・・・すけ・・・て」

悲しい、寂しい、怖い、暗い

一人だ、俺は一人だ

俺は一人で死ぬんだ

・・・やだ

やだやだやだやだやだやだやだやだやだやだやだ

やだやだやだやだやだやだやだやだやだやだやだ

やだやだやだやだやだやだやだやだやだやだやだ

やだアアアアアア!!!

死にたくない!

死にたくない死にたくない死にたくない

死にたくない死にたくない死にたくない

死にたくない死にたくない死にたくない

死にたくない!!!

俺はまだ、高校卒業してないのに

まだ、彼女とかつくってないのに

まだ、就職してないのに

まだ、親孝行してないのに

まだ、まだ、まだ、まだ

(・・・眠い・・・本当に死ぬんだ・・・)

もう、寝よう疲れた

父さん、母さん、さようなら・・・・・・・・

こうして俺という短い人生は呆気なく幕を閉じた

筈だった

プロローグ2

(ん、ん？　ここは何処だ？)

目が覚めた彼の目には異様な光景が広がっていた

それは、全てが真っ白に染まっていた

前も、後ろも、右も、左も

全てが真っ白だった

(なんだよ？　なんなんだよ、これ)

ま、待てとりあえず落ち着け俺

とりあえず状況を確認しよう

ここに来る前は確か・・・

あつ、俺死んでしまったのか？

本当に、死んでしまったのか？

俺は・・・

(とりあえずここは何処だ？　考えてちゃだめか、行動して見るか)

俺はそう思うと立って右手を突き出して歩いてみた・・・・・・・・

・

俺が歩き出して、どのくらいたったのだろうか？

5分？　10分？　一時間？　それとも1日か？

わからない　やっぱり時計とかないと不便だな

それにしても壁まだかな？

はア、はア、疲れたくどんだけ広いんだよここ

はア)

俺はため息をつき俯いた

(ん?なんだあれ?)

顔を上げるとさっきまでなかった扉があった

(何これ? 何処につながっているんだろ? 入って見るか?)

俺は、興味本位で扉を開けて入ってみると、そこには

部屋があった、その部屋には、ソファーや本棚、机や時計

普通の部屋だった

でも普通ではなかったところもあった

照明は暗い青色で

正面に時計がある壁には、エレベーターで下におりているようなか
んじで

俺には、見覚えのある部屋だった

そう、この部屋は、ペルソナ3に出てくるベルベットルームだった

(なんでこれがここに?)

????「ようこそ、客人」

????「え?」

声がしたのは俺の背後だった

誰だ?

そう思いながら後ろに振りかえったそこには

白く、長髪で

白い髭を生やしたお爺さんだった

????「だっ、誰だ?」

ゼウス「私か？ 私はゼウスだ」

????「ゼウ、ス？ ゼウスってあの最高神の？」

ゼウス「そうだ」

(本当かな?)

「本当だ」

????「え、なんで考えていることがわかる？」

ゼウス「私が神だからだ」

(もういいや)

????「俺は、・・・あ、あれ？名前が思い出せない？」

ゼウス「お前が死んで、存在が消えてしまったため

死ぬ前の名前が思い出せないのだろ」

????「そうなのか」

ゼウス「随分とかるいな」

????「だって名前が思い出せない程度で別にこまらないじゃん

思い出せないまたは、ないのなら新しい名前をつければいいじゃん」

ゼウス「そうか、突然だがお前には平行世界に行ってもらおう」

「???」え、なんで？ 俺は死んだんだぞ？」

ゼウス「それは、私の部下がお前を間違っ
て殺してしまったからだ
それで、そのお詫びとしてお前を平行世界に送る」

「???」そっか、場所は何処なんだ？」

ゼウス「魔法少女リリカルなのはの世界へ行
ってもらう事になる」

「???」わかった」

ゼウス「それと、特典もつけるぞ」

「???」いいのか？」

ゼウス「言っただろ、お詫びだと特典は何
でもいいし何個でもいいぞ」

「???」んじゃ、Fate/stay
nightにでてくる投影
魔術の使用可と魔術回路百本、

そらのおとしものにてくるエンジェロイドの武装、性能
の使用可

テイルズシリーズにてくる技、術の使用可、TP無限
戯言シリーズ、人間シリーズにてくるスキルの使用可
俺の体のスペックを面影真心並みに

ネギまの魔法の使用可、魔力はナギの十倍
あと俺を不老にして年齢は十歳から五十歳まで
容姿はTOVのユーリ・ローウェルで」

ゼウス「うむ、わかった」

名前はどつする？」

ユーリ「名前は・・・ユーリ・アリアダストで」

ゼウス「うむ、決まりだな

「そのドアを通れば目的地につくぞ」

ユーリ「わかった、んじやな神様」

俺は扉を通ったすぐに眩しい光がきて
目を手で庇いながら進んだ

主人公紹介

主人公設定

名前：ユーリ・アリアダスト

性別：男

年齢：十歳〜五十歳

容姿：TOVのユーリ・ローウエル

好きなもの：歌、ゲーム、本、暗いところ

涼しいところ、静かなところ、冬、
炭水化物と甘いもの、金、猫など

嫌いなもの：うるさい人、暑いところ、太陽、夏、真夏の海

能力：TYPE - MOONにでてくる投影魔術の使用可、魔術回路
百本

ネギまにでてくる魔法の使用可、魔力はナギの十倍
テイルズシリーズにでてくる技、術の使用可、TP無限
それのおとしものにでてくる武装、性能などの使用可能
戯言シリーズ、人間シリーズにでてくるスキルの使用可
自分の体のスペックが面影真心並み

性格：あまり素直じゃない、
人見知りする

趣味：読書、ゲーム、ネット、射撃

主人公紹介（後書き）

第一話 始まり

ユーリ「……ここはどこだ？」

他人から見れば頭が可笑しい人に見えるかもしれないが、
もう一度言おう

ユーリ「ここはどこだ？」

俺が今いる場所は………砂漠だ

目の前に馬鹿みたいに広々と砂漠が広がっている

ユーリ「………」

右：砂漠

左：砂漠

前：砂漠

後ろ：砂漠

上：青空&眩しい太陽

下：自分の影&砂

見事に上下前後左右大量の砂の海と暑苦しく輝く太陽・・・立派な砂漠だ

ユーリ「・・・不幸だ」

いや、マジで・・・

ユーリ「・・・どうすんだよ」

周りには砂漠しかない、遠くのほうにも目を凝らしてみるが・・・

・砂、砂、砂

砂・・・

はあ〜

マジでどうしよう・・・

とりあえず歩こう・・・

はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、はあ

・・・何もなし

ユーリ「……いきなり死亡フラグ？」

クソお！

おおおおおお!!!!!!!!!!!!!!!

ん？

ユーリ「今度はなんだ？」

いきなり遠くの方から大声が聞こえた

それは、一人二人の声ではなくかなりの大人数

ユーリ「……行ってみよう」

俺は声のする方へ足を向けた

しばらく歩いてみると、そこには沢山の人が剣で互いを斬り合い、
光の弾?の様な物を飛ばし当てたり
沢山の人が血塗れで倒れていたりとは異様な風景だった

何だ?これは、戦争か?

男「死ぬエエエエ!!!」

何か剣を持った男がこっちに向かってきた

ヤバイ！殺される

何かないか！何か！

俺は本能で自分が殺されるということを感じた

俺は必死でポケットの中を探して武器になりそうなものを探した

見つからない・・・、ヤバイヤバイヤバイヤバイ！！！！

どうしよう！！！！！！！！！！

俺がどうしようか考えていたら剣を持った男が斬りかかって来た

ブン！

ユーリ「っ！」

男は剣で真直斬り（唐竹割り）をしてきた

俺はそれを横に背中から転がるようにに避けた

ユーリ「はあ、はあ、」

何とか受身を取れて体勢を整えようとしたとき

そこに追い討ちをかける様に剣で俺を突こうとした

ユーリ「！！」

俺はそれを後ろに跳ぶように避けた

体勢を整えるために後ろに少し下がって相手との距離を置いた

その隙に俺は思考した

どうすればいい？

こいつを倒すにはどうすればいい？

考えろ、考えろ

どうすればこいつを倒せる？

どうすれば、どうすれば……

……そうだ！

投影魔術を使えばいいんだ
だが、どうやって使うんだ？

男「オラアアアア！」

男がまた俺を殺すために剣を振り上げる
クソ！

とりあえず武器だ！武器を創造しろ！

俺が創造するのは……

ユーリ「トレース・オン」

その瞬間手から光が発して、しばらくすると光が収まり
自分の手に一振りの刀が握られていた

それは日本刀だ

柄頭と呼ばれる所は金色で、柄は白でときどき黒い点が入ったり
鍔は柄頭と同じく金色で、刀身の棟の部分は黒、刃は白っぽい銀

TOVのユーリ・ローウェルが使っていたニバンボシだ

男「なッ何だ！」

男は驚いていたが俺には目に入っておらず
心の中で感激していた

やった！これで倒せる！

俺はそう思うとニバンボシを片手に男に向かって走った

ユーリ「ハアアアア！」

俺はニバンボシで右袈裟斬りで相手を斬りつけた

ああ、俺は人を殺したのか

ようやく気付いた。

さっきまで夢中で斬っていたのに俺は終わってようやく気付いた

周りには誰もいない

さっきまで大勢いた人達は皆、自分が殺したのか

俺はそう思うとだんだん意識が薄れていった

そして、倒れた

遠くの方から足音が聞こえる

俺はまた死ぬのか・・・

薄れ行く意識の中で声が聞こえた

「???」・・・だ・・・う・・・か

そして俺はとうとう意識を失ってしまった

俺はこの人を殺したという事が夢である事を祈って眠りについた

第一話 始まり（後書き）

設定では面影真心・・・橙なる種並みのスペックがあるにもかかわらず、すぐに反撃しなかったのは自分の体の異変に気付くよりも相手をどうするか考えていてそれどころではなかったからです

そして次回はあの人と会います

第二話 出会い

ユーリ「ん……はあゝあ……ここはどこだ？」

なんかデジャブを感じるんだが……気のせいか？

まあ、いいか

俺はなんでここにいるんだっけ？

そうだ、俺は人を殺したんだ……

最悪だ……せめて夢であってほしかった

自分の今の状況を説明するとベットで寝ていた

しかも、どこにでもあるベットではなく周りにカーテンが付いていたりとする

イタリア高級ベットだ

知らない人は自分で調べてくれ

でだ、なんで俺はここにいるんだ？

コンコン

ドアをたたく音がした誰か来たのか？
ガチャ

????「失礼します」

ドアを開けて入ってきたのは女性の声だしかもメイド服なぜ？

????「あら？起きたんですね」

ユーリ「あの、ここはどこですか？」

????「少々お待ちください

今、オリヴィエ様を呼んで来ますので」

ガチャン

そういつてメイド服の女性はドアを閉めてどこか行ってしまった

どこにいったんだ?しかもオリヴィエって

数十分ぐらい過ぎるとまたドアをたたく音がきこえた

コンコン

誰か来た・・・今度は誰だ?

ガチャ

入ってきたのは・・・

「????」目を覚ましたんですね」

「すげ〜美人だな

ユーリ「あの・・・あなた誰ですか？」

「????」私は聖王オリヴィエ・ゼーゲブレヒトです

「あなたは？」

「なんと聖王オリヴィエ・ゼーゲブレヒトだ
びつくりだな、しかも王女だ

赤と緑のオツドアイ、それにしても綺麗だな

ユーリ「俺はユーリ・アリアダストです

「よろしくお願いします

「オリヴィエ王女殿下」

オリヴィエ「ええ、よろしくユーリさん」

第三話 会談

オリヴィエ「突然ですが、何故あのような所にいたのですか？」

ユーリ「それは・・・」

言えねえ〜！

元の世界で死んで転生してこつちの世界に来たなんて言えねえ〜！

ユーリ「それは・・・気付いたらあそこに居いました」

とりあえず嘘を付く事にした

本当のこと言っても信じられないだろうし
てか、・・・ばれるよな絶対

オリヴィエ「・・・何も覚えてないのですか？」

ユーリ「そうです」

また嘘付いた

オリヴィエ「・・・そうですか」

絶対信じてないな。まあ、嘘だからな

オリヴィエ「では、何故自分の名前は覚えているのですか？」

記憶喪失ならば、自身の名前なども覚えてないのでは
？」

ユーリ「それは、・・・ぱつと頭に浮かんだものがそれだったんです
ちょうど名前ばかりだったので」

オリヴィエ「・・・そうですか」

すげ〜疑われてる

オリヴィエ「自分が誰かと戦っていたことも？」

ユーリ「いえ、気を失う前のことは憶えています

ただあそこに来る以前の記憶がなくて

あつ、そういえば服替えさせてくれたんですか？」

いまさらだけど気付く

オリヴィエ「ええ、血で汚れていましたし」

ユーリ「有り難うございます」

オリヴィエ「ふふふ、どういたしまして」

ユーリ「それで、あの・・・俺はどうなるんでしょうか」

オリヴィエ「しばらくの間、ここにいますことになります」

ユーリ「しばらくはらくらくして・・・どのくらいですか？」

オリヴィエ「それは……まだわかりません」

ユリ「そうですか……」

オリヴィエ「それでは、失礼します」

ガチャン

そう言って去っていった

はあくなんかすごく疲れた……

俺どうなるのかな？

第四話 戦争開始（前書き）

少し設定を変えた

第四話 戦争開始

オリヴィエと出会い数日がたった

え？時間がたちすぎだって？

作者の技量不足だ

んで、今の俺の現状はというと

オリヴィエいわく、こちらの状況がかなりヤバイらしい。

壊滅一步寸前みたいなの

それで、一時的に俺がオリヴィエ側の戦力として入るみたいなの事言

つてた

大丈夫かな？

はい、と言う訳で回想終了！

今、俺は出撃する前。

例えで言うと体育祭の校長先生のお話みたいなかんだ。

兵士達「おおおおおおおおお！……！！……！！……！！……！！」

どうやらお話は終わったみたいだ。

全然聞いてなかったけど。

そこからしばらく時間が経ち、突撃する前の状態だ。

すごい静かだ。

あと、めちゃくちゃ暑い

ちなみに場所は砂漠だ

敵の数は約5000万

こっちの戦力、300万

差があきすぎてるやばい

死亡フラグか？

「突撃！……！！……！！」

始まった。

始まっちゃった

また人殺しするのか。

なんかヤダな……………

神様に注文するときには零崎の性質とか貰っとけば良かったかもな。

でもまあ、始まっちゃったんだから

しょうがないのかな？

わっ、

長話はいい位にしてそろそろやるか

ユーリ」殺して解して並べて揃えて晒してやるよ」

俺は先ず最初に、ナイフを投影して沢山いる敵に向かって
走って斬り殺した

なんで、バリヤジャケットの上からナイフで殺すことが出来るのか

そんな事、俺が人類最終だからだ！

答えになってないな。

まあ、あれだ、え〜と……バリヤジャケットを突き破るぐらい強い
って事だ。

俺とナイフが。

次の目標に向かってナイフを上から一直線に下に向かって真っ二つにした。

すごい、バターみたいに斬れる

俺はその後、少し速く走って接触間際にナイフを突き刺し

その後、またナイフを投影して同じく接触間際に相手の左斜め下から右斜め上に
向かって斬る

そして、また違う敵に向かって斬る

斬る斬る斬る斬る刺す斬る刺す投影刺す投影斬る刺す斬る刺す投影
斬る刺す投影刺す投影斬る
投影刺す斬る斬る投影刺す刺す投影斬る斬る斬る投影斬る刺す斬る
投影斬る刺す斬る刺す刺す

はっ！

ユーリ「魔神剣！」

俺は剣を投影して地面をはう衝撃波を敵に向かって打つ

敵「ぐは!!」

敵は吹っ飛んで地面に倒れた

次!

ユーリ「散沙雨!」

敵に接近し、剣で連続で突き刺した。

敵「うおお!!」

剣をそのまま敵に突き刺したまま新たな剣を投影した。

次!!

ユーリ「虎牙破斬!」

そして、違う敵に接近して下から上に向けて斬り上げまた上から下に向けて斬り下げた

また、違う敵に接近して

ユーリ「瞬迅剣！」

剣を前に突き出して、突進して突き殺した

刺さっている剣をそのままにして俺は翼を出して飛び上がりながら
少し後ろに

後退し、翼を左右に広げ

ユーリ「アルテミスArtemis！」

翼から永久追尾空対空弾を打ち出す

ドカン！ドカン！ドカン！

小さい爆発を起こしながら敵を殲滅させる

さらに、俺は空を飛んだまま

ユーリ「雷の精霊199柱 サキタ・マギカ魔法の射手
セリエス連弾・雷の199矢！！！」

魔法の射手で、電撃属性の「雷の矢」を放つ。

ドカン！ドカン！ドカン！

また、そのまま敵を殲滅する

それから、しばらく経った後

絶望的な戦力差で勝ったのはオリヴィエ側だった

見事勝利を収めた

そして俺はそのままオリヴィエがいるであろう城に帰った

第五話 戦争終了後、

文書的には短く、俺が生きる世界での一つの戦争が終わった。

終わってからまだ、数時間しかたっていない。

俺は、今オリヴィエに呼ばれて玉座の間に行くため、長い廊下を歩いている。

42

少し目立ちすぎたかな？

まあ、やってしまった物はしかたない。

だが、俺の力の事で何か言われるかもな。

……どう話すか。

やっぱり嘘を付いて切り抜けるか・・・。

実際、むこうから聞いたら戯言以外のものはない。

頭の中で玉座の間での聞かれるだろう事を整理していたら、目の前に他の扉とは違う
豪華で大きい扉が見えた。

その扉を守るかのように左右に立っている魔道士が己の武器を交差するように立てていた。

俺はその魔道士達が守る扉の前で歩くのを止めた。

オリヴィエ「入りなさい」

と、オリヴィエの声が聞こえ、左右にいた魔道士達が引いて扉が開いた。

玉座の間の一番組にある大きく、豪華な椅子に座っていた。

オリヴィエ「先の戦いでは随分とご活躍されていたのですね」

ユーリ「知ってたんですか」

オリヴィエ「ええ、噂で持ちきりですよ。

見た事も聞いた事もない魔法を使って敵の魔道士を圧倒していたと。」

ユーリ「……………そうなんですか。」

オリヴィエ「……………何故嘘を付いたのですか？」

やっぱり聞いてきたか……………。

ユーリ「それは、突然思い出したんです。

相手を、その、殺す事を考えていたらいきなり。」

我ながら見え透いた言い訳、もとい嘘だな……………。

オリヴィエ「……………。」

ユーリ「……………。」

二人の間に僅かな沈黙が出来た。

オリヴィエ「……いきなり、ですか？」

ユーリ「ええ、いきなり……。」

……。

オリヴィエ「では、今もほとんど何も覚えてないと、そう、仰るのですね。」

ユーリ「はい。」

オリヴィエ「……わかりました。」

今回の事に関しては触れないようにして置きます。
ですが、忘れないでくださいね。」

貴方が裏切ることを知れば、即、切り捨てるといふ事を。

ユーリ「はい。

胆に命じておきます。」

オリヴェエ「では、下がりなさい。」

言われるがままに俺は玉座の間から出て行った。

第五話 戦争終了後、（後書き）

オリヴェイエの口調がわからないこれでいいのか？

第六話　そして、夜は更ける

オリヴィエからの警告を受けた俺は、数日前に俺宛に用意された部屋に戻り、
これからの事を少し考えていた。

ユーリ（これからどうしよう……………）

全くのノープランだ。

今まで何とか戯言にすらならない嘘を付いてきたが、……………。

……………限界か？

オリヴィエが死ぬのは何時なのかはわからないが、
大規模な、まさしくこのベルカ王国がこの時代が滅ぶ。

……………まだ、このぐらいしか分からない。

オリヴィエが死んだ後は次元世界を当てもなく彷徨うしかなくなる
な……………。

原作が開始するのはもつと後の話だ。

十年、二十年とそんな短い時間ではない。

百年、二百年。

へたすれば千年、二千年。

それぐらいになるかもしれない。

正確な時間は分からないが。

.....

.....どうしよ.....。

一応、不老ではあるが、不死ではない。
老けることないけど寿命が.....。

人間が生きていられるのは約150年ほど。

さっきの戦闘では、怪我しなかったからな。

怪我、骨折したり、腕や足が切断されても回復はする.....かも。

試していないから分からないけど.....。

…試してみよう。

ユーリ「トレース・オン」

俺は投影魔術で普通のサバイバルナイフを投影した。

では先ず、左腕の真ん中辺りを浅く裂いた。

ユーリ「さて、どうなる？」

実際にしてみたら、浅く裂いたところがビデオの巻き戻しのように戻っていった。

これぐらいなら骨折しても斬られても平気かな？

さすがに切断は分からないけど。

……………試してみるか？

いや、だが、実際に治るかどうかわからない。

だけど、……………止めておこう。

もし、治らなかつたらやばいしな。

さて、……………今更だけどこんな事になるんだつたら不死も頼めば良かった…。

……………まあ、なんとかなるだろう。

たぶん。

そう思って俺は思考することを止めてベットに入った。

ユーリ（とりあえず、今は後の事を考えるのは止めておこう）

考えるのはアイツ……………オリヴィエが死んでからにしよう。

ユーリ「という訳で、お休み……」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4717r/>

コウツウジコロサレヒト

2011年11月26日01時47分発行